2021 年度秋季卒業式　学長式辞
学長　北山 修

本日、ここに 2021 年度秋季卒業式を挙行するにあたり、大学を代表して、卒業生諸君、ならびに、ご列席のご家族の皆様に対し、心からお慶び申し上げます。

本日卒業するのは、経営学部 14 人、法学部 4 人、教育学部 8 人の 3 学部合計 26 人であります。

今回の卒業式は、昨年度に引き続き、本学の卒業式の歴史においては珍しい「コロナ禍」での特別な卒業式であります。それも、秋の少数の卒業生を送り出す、普通の卒業式とは一風変わったあまりない卒業式となります。しかし、その意味は、皆さんにとって受け取り方は様々でありましょう。

その上、台風までやってくるという、この「今ここ」で、皆さんは卒業するのです。

ここで強調したいことは、大きな感動とは、いつもこの「今ここ」の一回しかないことにあります。光陰矢の如しであり、年老いた私は時間って早いものだと感じるのです。特に目の前のこの瞬間は、一回限りである。この時間はあっという間に通り過ぎてゆく。これを「聖なる一回性」と呼ぶ人がいます。

例えば、この前のオリンピック・パラリンピックにおけるどのような演技も勝利も、そして敗北ですら、厳密には一回限りでした。取り返しがつかない。そして、この絶対に一回しかないところが、とてつもない感動を呼んでいました。

私の幼い頃に体験した 1964 年の東京オリンピックでは、感動はもっともっと大きかったのです。つまり、それを後から見ることができるなどとは思っていなかったのです。その分、ラジオやテレビにかじりついてその一回を楽しんだものです。しかしながら、録画と配信の技術により、多くのイベントで映像による記録が公開され何度も視聴できるようになりました。考えてみると、録画して後から見ようとしたときから、感動は急激に衰え始めたと思うのです。

録音機がなかった私の思春期は、ラジオから流れる多くの新曲、特にビートルズは、すべてこの耳で覚えねばなりませんでした。ラジオで一回聞いただけで、学校に行くと、大体を歌えるようになった天才たちが結構いたものです。つまり、見逃すと聴き逃すと、二度とないかもしれないと思うから、今、ここのラジオにかじりついたのです。

今は、ライブハウスやコンサートの生演奏はめっきり少なくなりましたが、同じ演奏が動画サイトで何度も視聴できます。スポーツでは、どこが凄いのか、誰が勝ったのかすら、ビデオで見ないとわからない競技が増えてきました。

今日、ほとんどがオンラインであり、ビデオであり、録画の再生です。つまり、プレイバックできるのです。それで、「ありがたさ」もまた消えてしまいます。

こうして、ライブを心から愛する私たちにとって、何でも録画で見るという状況は、生の感動を極端に減らしていると思います。「聖なる一回性」、日本語で言う「ありがたみ」がなくなったのだというわけで、感動の量も質も、めっ

きり減ってしまいました。
　しかし、重要なのは、物事はあるのが難しいからこそ、ありがたいことです。それが、滅多にないからこそ、価値が高くなるという常識的心理学であります。
　皆さん、今日の日は二度とないのです。この白鷗大学で過ごした時間、そして今日の日はプレイバックできないのです。だから今日の卒業式は、実に価値が高い。規模は小さくとも、思い出としては大きいのです。この瞬間は二度とない。
　今日は、非常にユニークな、思い出に残る卒業式となるでしょう。これは、あちらにもある、こちらにもあるというような卒業ではありません。
　物事は、いろんな意味で、再生不能であり、今日の日も一生に一回であり、人生もまた一回です。だからこそ、かじりついて、大事にして、育てていただきたい。
　さあ皆さん、白鷗大学の卒業生の一人として、元気に出発いたしましょう。いつも申し上げますが、旅たちの日、それが卒業式の基本的な意義でしょう。だから、心からご卒業おめでとうございますと申し上げ、どこにもない、たった一度の充実した旅となることを祈りたいと思います。
　皆さんのご健闘とご多幸を祈念します。